

の號があります。

天明の俳壇

蕪村は潤達、自由の見地よりあらゆるものを美化し、詩化したる俳風は確に其の特長であります。蕪村の本領は「春泥集序」に於ける沼波との俳諧問答の一端を左に掲げ参考に供しませう。

余(蕪村)曾て春泥舎召波に洛西の別業に會す、波、すなはち余に俳諧を問ふ、答へて曰く俳諧は俗諺を用て俗を離るゝを尙ふ、俗を離れて俗を用ゆ、離俗の法最もかたし、かの何がしの禪師(白隱)が隻手せうしゅの聲を聞といふもの、則ち俳諧禪にして離俗の則なり。波頓悟す……。

天明三年十二月歿す、行年六十八歳。

三椀の雑煮かゆるや長者ぶり 蕪村
春風や堤長うして家遠し 同
春雨やゆるい下駄借す奈良の宿 同

春雨や人住で煙壁をもる 蕪村
肘白き僧のかり寝や宵の春 同
畑打や我家も見えて暮かぬる 同
春の海終日のたりくかな 同
日は日くれよ夜は夜明けよと啼蛙 同
釣鐘にとまりて眠る胡てふかな 同
三尺の鯉くゞりけり柳影 同
菜の花や月は東に日は西に 同
涼しさや鐘をはなるゝ鐘の聲 同
さみだれや大河を前に家二軒 同
石切の鑿さましたる清水かな 同
二人してむすべば濁る清水かな 同

與謝蕪村

ほととぎす平安城を筋違い
かたつぶり何思ふ角の長短か
鮎くれて寄らで過行夜半の門
きりぎりす自在をのぼる夜寒かな
身にしむや亡妻の櫛を闇に踏む
烏羽殿へ五六騎急ぐ野分かな
朝霧や村千軒の市の音
白露や茨の刺に一つづゝ
憂き我に砧うて今は又止みね
手燭して色失へる黄菊かな
我骨のふとんにさはる霜夜かな
寒月や枯木の中の竹三竿

燕村

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

木枯や鐘に小石を吹きあてる
宿かせと刀持出す吹雪かな
屋根ひくき宿にうれしさよ冬籠
麥蒔の影法師長き夕日かな
水鳥を吹あつめたり山おろし
西吹かば東にたまる落葉かな

同 同 同 同 同 同 燕村

高井几董

几董は京都の生れ、燕村の高弟で、同門の召波と共に嶄然として輝いた人です。あります。召波は才幹を以て几董は勉強を以て大を成したといはれて居ります。燕村歿後僅か六年の寛政元年彼も亦世を去りました。

門口に風呂たく春のとまりかな

几董

元日の酔詠に来る二日かな
 日は落ちて増すかとぞ見ゆる春の水
 春雨や蓑の下なる戀衣
 やはらかに人わけ行くや勝相撲
 年一つ老ゆく宵の化粧かな
 大佛を見かけて遠き冬野かな
 俳諧に古人有世のしぐれかな
 いたく降と世に語るや夜半の雪
 枯々て光をはなつ尾花かな

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 几 董

春泥舎召波

召波は几董と共に蕪村の左右の腕とうたはれた人でありますが、蕪村より先

立つこと十三年、蕪村はその早世を悲しんで「我俳諧西せり」と三泣したとの
 ことでもあります。若し彼が長世して蕪村後にあるならば天明以後の俳壇を一層
 光輝あらしめたであらうことは疑のないことでもあります。

底たゞく音や餘寒の炭表
 月更けて桑に聲ある蠶かな
 いとゞしく花に怠る箒かな
 花踏て戻る公卿の草履かな
 うかと出て家路に遠き踊かな
 夕日影道まで出づる案山子かな
 質置の糸む門や冬の月
 炭うりや京に七つの這入口
 人聲の小寺にあまる十夜かな

召 波
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 一八五

革足袋で村あるかるゝ醫師かな
何を釣る沖の小舟ぞ笠の雪
草の戸や盃足らぬ鶏卵酒
一函の皿あやまつや煤掃

召波
同
同
同

其他の蕪村門人

几董、召波の外に蕪村門下の人々に寺村百池、芦陰舎太魯、松村月溪等を數へることが出来ます。

つばくらの花なくなりし三軒家
春の夜や喧嘩のあとの小唄節
唐辛子つれなき人に參らせん
木枯や川吹もとすさゝら波

百池
同
同
同

耕すや世を捨人の軒端まで
うしろより雨の追くる燒野かな
蚊帳を出て物争へる翁かな
ともし火に冰れる筆を焦しけり
淺ましや晝の螢の寝もやらす
雨雲にめぐりもあはで夏の月
稻の葉の青かりしよりかゞし哉
二三尺秋の響や落し水

太魯
同
同
同
同
月溪
同
同
同

炭太祇

不夜庵

太祇は不夜庵と號し、江戸に生れ、京都島原に移住した人で、蕪村と共に天明の俳壇に輝ける作家であります。彼の俳句は十數日間室内にこもるといふ程

炭太祇

の熱心家で、自然句數も多く而も名句が多かつたのであります。
明和八年六十三歳にして歿す。

情なふ蛤乾く餘寒かな
はる寒く葱の折ふす畠かな
長閑さに無沙汰の神社回りけり
雉追ふて叱られて出る畠かな
七草や兄弟の子の起きそるひ
春駒や男顔なる女の子
山路きてむかふ城下や風の數
腹立てゝ水呑む蜂や手水鉢
里の子や髪に結なす春の草
歸る雁聞かぬ夜かちになりけり

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
太 祇

犬を打つ石の扱無し冬の月
山吹や葉に花に葉に花に葉に
蝶飛ぶや腹に子ありてねむる猫
寺からも婆を出されし田植かな
物かたき老の化粧や更衣
角出して這はでやみけり蝸牛
行秋や抱けば身に添ふ膝頭
今朝見ればこちら向たる案山子かな
酔ふして一村起きぬ祭かな
引けば寄る蔦や梢のこゝかしこ
句を煉て腸うごく霜夜かな
掃けるが遂には掃かず落葉かな

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
太 祇

寒月や我ひとり行橋の音 太 祇

田川移竹

移竹は蕪村、太祇と共に重鎮でありましたが太祇ほどの功績は残して居りません。蕪村よりも二十二年前に歿しました。彼は新風の鼓吹に力を致しましたが、蕪村の起したる天明の盛を見ずに逝つたのは惜しいことでもあります。蕪村は彼を惜みて

新風鼓吹

去來去り移竹移りね幾秋ぞ 蕪 村
と吟じて居ります。

家遠し海苔干す女何諷ふ 移 竹
蛤につれなき汐の行衛かな 同

馬の背の高きにのぼり蕎麥の花 移 竹
焼味噌を伽羅に侘る夜杜宇 同
木枯の湯の山寒し湯女の顔 同

大島蓼太

蓼太は信濃伊那の人、江戸に出て雪中庵を嗣ぎ著書と行脚によつて勢力も非常に盛んでありましたが、圓熟の域に達するには尙餘程の距離がありました。天明七年八十歳にて歿す。

雪中庵

世の中は三日見ぬ間に櫻かな 蓼 太
物いはぬ夫婦なりけり田草取 同
馬借りてかはるくに霞けり 同
掃音も聞きて淋し夕もみぢ 同
大島蓼太

更る夜や炭もて炭をくたく音

蓼 太

高桑 闌 更

南無庵

闌更は加賀金澤の人、後京都に出て南無庵を結び又半化坊と號しました。曉臺歿後、花の木宗匠を許され大いに俳道に精進しました。彼の句には多少の俗氣はありますが、奇をてらはず、優雅なる處に其の趣があります。寛政十一年七十三歳で歿しました。

雪消えて麥一寸の野面かな

闌 更

元日や松靜なる東山

同

鞘赤き長刀行くや春の野邊

同

川船や雲雀啼たり右左

同

摘くて人あらはなる茶園かな

同

鵜の面に川波かゝる火影かな

蓼 太

枯芦の日にく折て流れけり

同

明月や座頭の妻のかこち顔

同

山道の下に聞へて鳴子かな

同

加藤 曉 臺

花の木宗匠

曉臺は最初江戸に住み、後名古屋に移り更に京都で餘生を途つた人でありま
す。五十九歳の時花の木宗匠の免許を受けました。俳調は蕪村に私淑したやう
であります。寛政四年六十一歳で逝去しました。

火ともせは裏梅かちに見ゆるなり

曉 臺

春寒し貧女がこぼす袋米

同

日暮れたり三井寺下る春の人

同

加藤 曉 臺

雛の間に取られて暗き佛かな
 蝙蝠や月の邊を立ちさらす
 風かなし夜々に缺ゆく月の形
 寒菊に南天の實のこぼれけり
 落葉落かさなりて雨雨をうつ

曉 臺
 同 同 同 同

三浦 樽 良

無爲庵

樽良は鳥羽の人、後伊勢に無爲庵を結び俳風改革を唱道しましたのは大きな手柄であります。蕪村より十三歳の後輩でありながら蕪村より三年前即ち安永九年五十二歳で歿しました。

梅が香に驚く梅の散る日かな
 山寺や誰も知らぬねはん像

樽 良
 同

雲高く風たへて花のあらし山
 花ながら春のくるゝぞ便りなき
 脛にも響くまつりの大鼓かな
 雁かねの重なり落る山邊かな
 風や日も照り雪も吹ちらす
 兄弟か同じ聲なる鉢たゝき

樽 良
 同 同 同 同 同 同

享和前後の俳壇

芭蕉以來一時衰退に向ひました俳壇は蕪村が出て、中興の實を結びましたが、その頃の俳匠も次第に泉下におもむいたゝめ再び俳壇はさびれんとしました。尙當時は天明時代の余光を保つ俳人もかなり居りました。其中稍下つて文化、文政の頃信州に一茶が出て一種の境地を開拓し俳諧史上特異の光彩を添へたの

享和前後

であります。

小林一茶

俳諧寺

一茶は信州柏原の人、早く母を亡くして八歳の時繼母を迎へ十歳の時義弟仙六が生まれました。以來一茶は不遇にありましたので十四歳にして江戸に出ました。江戸では或る儒家の僕となり、更に素丸の門に入り初めて俳諧の第一歩を踏み出したのであります。當時は菊明又は竹河と號しました。後素丸の門を出て、俳諧寺一茶の號を用ひました。

一茶の生涯は貧苦と不遇の中に終止致しました。彼の俳句はこの生活を土臺とした、肺腑よりの叫でありました。而も句は素朴、經妙で諷刺に富んだ點は確に一異彩を放つて居ります。俗語を取り入れて卑に墮ちず人間味豊かな彼の藝術は、蕪村以後の技巧萬能の反逆者とも云へませう。

我と來て遊べや親のない雀 一茶

これは一茶が六歳の時の句であると云はれて居ります。幼くして人情の輕薄を味はつた彼としてもつともなことでありませう。

五十の時柏原に歸郷して家を持ち、三十六年の漂泊を終へ宿望の安息所を得ました。

おのれやれ今や五十の花の春 一茶

五十二歳ではじめて妻帯、文政十年六十五歳で亡くなりました。

元日や上々吉の淺黄空 一茶

ことしから丸儲ぞよ娑婆遊び 同

這へ笑へ二つになるぞけさからは 同

小林一茶

俳句略史

わが春やたどん一つに小菜一杷
折りてさすこれも門松にて候
初夢に古郷を見て涙かな
萬歳や馬の尻へも一祝
目出度といふも二人の雑煮かな
茶をのめと鳴子引なり朝かすみ
目出度もちう位なりおらが春
蝶が来てつれて行けり庭の蝶
雀の子そこのけく御馬が通る
瘦蛙まけるな一茶是にあり
大蛙から順々に座とりけり
涼まんと出れば下に下にかな

一九八

茶

同同同同同同同同同同同

名月を取つてくれろと泣く子かな
人並に疊の上の月見哉
夜に入れば精出して湧く清水かな
やれ打つな蠅は手をすり足をする
松蔭に寝てくふ六十餘州かな
雁よ雁いくつの年から旅をした
下も下下下の下國の涼しさよ
老ひけりな扇つかひも小ぜはしき
大根引大根で道を教へけり
寝かへりをするぞそのけきりぎりす
焚くほどは風がもて来る落葉かな
小言いふ相手もあらばけふの月

小林一茶

茶

一九九 同同同同同同同同同同同

我門へ來さうにしたり配り餅
 一 茶
 是がまあ終つひの栖すまか雪五尺
 同
 ともかくもあなた任せの年のくれ
 同
 寒聲といふも南無阿彌陀佛かな
 同

夏目成美

成美は寛永二年江戸に生れ、豪商であつたが、弟の吟江と共に俳諧に志したのであります。文化十三年六十八歳で歿。

親鳥のひよこ遊ばす葵かな
 成 美
 五月雨や西と東の本願寺
 同
 淋しさにつけて飯食ふ門の菊
 同

文化時代の俳壇

この時代では東北に松窓乙二、吉川五明、常世田長翠、小野素郷あり、屋に朱樹史士朗など有名であつた。其他藤森素檠。建部巢兆も活躍しまし

天保時代の俳人

先に述べました通り、元祿、天明の時代は俳諧史上最も光輝を放つた時代でありました。そして文化文政を経た天保時代は俗調を發揮して蕉風全く地に落ちてしまつたのであります。その代表者は梅室、蒼虬などであります。

櫻井梅室

梅室は蘭更の門人加賀の生れであります。

文化、天保時代

湯屋の噂人見下して御慶かな
鶯や二聲鳴けば見たくなる
寝た人に會釋してかるうちわかな

梅室
同
同

成田蒼虬

蒼虬も加賀の人で、關東の門人なることも梅室と同様であります。

鶯や隣まで来て隙のいる
ものいはぬ柱によりて今朝の秋
ひと廻しまはしてあたる火桶かな

蒼虬
同
同

明治以後の俳風

天保の頃から又々墮落した俳界は明治に至つても老鼠堂永機、其角堂機一、

革新運動

春秋庵幹雄などの宗匠達が古壘を守つて居りました。然るに明治十三年角田竹冷が俳句を新聞に掲げたので、漸く新機運を見せるやうになり、其後正岡子規が専ら研究して二十五年に「日本新聞」にその俳話を掲載して革新運動を起し遂に現代の俳句の基礎が出来て愈々隆盛となつたのであります。

子規によつて興された俳壇を新派又は日本派といひ、天保時代より傳はりたる宗匠派を舊派と稱へました。

こゝに又子規の日本派とは別に明治二十七年十月に大野酒竹、佐々醒雪、笹川臨風等の大學出身者によつて筑風會が出来、或は翌二十八年には秋聲會なるものが起りました。

これは尾崎紅葉、岡野知十、巖谷小波等が創立したもので、日本派に對抗して居りました。

日本派の俳人

子規の新派即ち日本派の人々には河原碧梧桐、高濱虚子、内藤鳴雪、松瀬青々、佐藤紅緑、夏目漱石、寒川骨、等々多士齋々であります。

現代一般に行はれて居ります俳風は子規及明治俳壇の餘風であります。

これに對し河原碧梧桐は所謂新傾向句なる特色を以て一派を爲して居るのであります。

昭和の現代及それ以後に於ては必ずや或る種の俳風の起る氣運に向つて居ることは明かでありませう。

若竹や 四 五 本 青 き 庭 の 隅 子 規
 初芝唐見て来て晴着いまだ脱がす 同
 春の夜や奈良の町家の掛行燈 同

新傾向句

宇治川やほつりくと春の雨 子 規
 うれしさの過ぎぬ正月四日なり 同
 大佛の大ききさ知れず秋の風 同
 會の日や晴れて又降る春の雨 同
 山吹や人形乾く一と筵 同
 大風に近よる鳶もなかりけり 同
 すれ違ふ汽車の小窓の燕かな 同
 眠らんとす汝靜かに蠅を打て 同
 地に落ちし葵踏み行く祭かな 同
 涼しさや荒壁落つる竹の風 同
 春風に尾をひろげたる孔雀かな 同
 朝寒やたのもと響く内玄關 同

日本派の俳人

藏開
店卸
十四日年越
小正月
餅花玉
女正月
藪入
御歌會始
廿日正月
鏡臺祝
飾

宿下り風居
注連飾輪色

門松
飾海老
橙飾る
串柿飾る
昆布飾る
松納
節納
年賀
女禮者
年賀狀
名刺受
年玉

松飾門の松
飾竹門の竹
松取る
注連取る
年始年廻り
慶一廻り贈り物
賀状

日記初
書初
讀初
初句會
初曆
初刷
寶船
初夢
笑初
謠初
御能始
舞初

筆はじめ
試筆
吉書初祝

蹴鞠始
彈初
初湯
初鏡
初寫眞
著衣始
若水
初手水
掃初
初竈
稽古始
初火事

ジキツハ

初商
初荷
賣初
買初
初芝居
羽子
手毬
風
破魔弓
繪雙六
かるた
寶引

初春狂言
はこいた
たこ
ボリカノ
すころく
トランプ

福引
萬歳
猿曳
春駒
傀儡師
獅子舞
大黒舞
鏡餅
鏡開
雜煮
太箸
大福

猿まはし

具足餅
餅開め

屠蘇 年酒 田タツ作ツクリ 數の子 結昆布 宗教 四方拜 元始祭 惠方詣 初詣 七福神詣 十日戎

植物

春の七草 福壽草 齒朶 榎ユツ うらじろ 親子草

春

時候

春の日 水き日 日水 遅日 暮かぬる 春の朝 春の夕べ

春の宵 春の夜 夜半の春 春の闇 暖か 春暑し 麗か 長閑 立春 春立つ 寒明 餘寒 春寒し 舊正月

二月 春浅し 早春 春めく 返え返る きさらぎ 仲春 三月 彌生 晩春 四月 夏近し 真隣 夏を待つ 暮の春 行く春 春深し 春惜む 八十八夜

天文

春の日 春日影 春の月 朧月 春の星 春の雲 春の空 花曇 春陰 初雷 春の雷 初電 初虹

春光 春風 東風 風光る 春の雨 春さめ 春の雪 あわ雪 春の霰 春の雲 春の露 春の霜 別れ霜 忘れ霜 霞 春霞 暮霞 草霞 朝霞 夕霞 暮霞

俳句季題抄 (春)

蜃氣樓

陽炎 ラカグ

地理

殘雪

ゆきげ 雪しろ

凍解

氷浮く 流水

春の氷解

なだれ

雪崩

山笑ふ

春の山

春の野

燒野 焼山

春の川

春の海

春の水

水温む

苗代田

春田

春泥

人事

春愁

春眠

春の夢

二月禮者 目見え

出代

二日灸

針供養

紀元節

建國祭

上巳 桃の節句

雛遊 雛の節句

寒食 雛合

闘鶏

地久節

天長節

學年試験 進級

卒業試験 卒業

觀櫻御宴

爐塞

種痘

捨頭巾

北窓開く

銃獵停止

三の替

都踊

浪花踊

競漕 ボートレース

汗干狩 しほひ

花見 花がり

野遊

摘草 よもぎ摘 草摺

茶摘 茶摘女 茶摘歌

桑摘

蠶飼 やうさん

野山を燒く 草焼く 芝焼く 野火 山火

耕田

田打 田をすく

畑打 畑を返す

種蒔く 種おろす

苗代 代かく

麥踏む

種物

花種蒔く

茄子蒔く

朝顔蒔く

鶏頭蒔く

蓮植うる

接木 つぎ種

挿木

菊の根分

菖蒲根分

俳句季題抄 (春)

干大根
櫻漬 花づけ
山葵漬
木の芽漬
木芽田樂 田樂
數の子製す
青餠 スアヲ
燒蛤
壺燒 かき茶
利茶
白酒
草餅

菱餅
櫻餅
鶯餅
菜飯
宗教
春祭
二月堂の行
義士祭
涅槃會
西行忌
茶種御供
利休忌

其角忌
釋奠
初午
伊勢參
遍路
大石忌
春季皇靈祭
彼岸 お中日
開帳
神武天皇祭
佛生會 羅佛
花祭

御身拭
御忌
御影供 クミエ
復活祭
聖母祭
動物
龍登天
猫の戀 うかれ猫 春の猫 猫の姿
猫の子
春駒
春の鹿
孕鹿

鹿の角落つ
鳥の巢
巢立鳥
鳥交る 鳥つるむ
轉り
鳥歸る
百千鳥
雀の子
鶯
燕 つばくらめ
雲雀 揚聲雀 落聲雀
鶯

駒鳥
連雀
雉
歸る雁 行く雁 雁の別
蛇出穴
蛙の子 お玉杓子
蛙 初蛙 貴蛙
櫻鯛 花見鯛
鱒 ラサハ
白魚
鱧 リサヨ
鱻

鯉ニシ 黄鯛魚コタ 鮎の子小鮎若鮎 初鮎はるこ 蠶はるこ 蝶胡蝶てふく 春の蚊 蛇 蠅生る 蜂 春の蚤 蟬の子

寄生蟲カド 蟹 飯蛸 田螺 蛤 蛭 浅蜩 櫻貝 植物 春の草若草 芳草 下萌草萌る 草青む 草の芽

草の若葉 春菊 金盞花 嫁菜 蓬 蒲公英ボタン 落の藎 葛サチ 茄子苗 櫻草 芹 三葉芹

防風 葛の若葉アサギ 紫雲英アサギ 豆の花アサギ 紫羅蘭花アラセイトウ 山葵 菜の花 三月大根 鶯菜 京菜 菠稜草ハハレ

チューリップ ヒヤシンス 菫 種芋 水芭蕉 若芝 春の筍 慈姑 杉菜 土筆 薇マイン

蕨 海苔 木の芽 連翹 躑躅 沈丁花 椿 藤 紫荊ハナズ 梅野梅 白梅 紅梅 花初花 花さかり 櫻初櫻 散る 山

残花
桃の花
李の花
杏の花
海棠
山櫻桃の花
莓の花
梨の花
山吹
篠懸の花
アケビ
通草の花
木蘭

柳
楊梅の花
銀杏の花
松の花
松の緑
夏の時侯
夏の朝
夏の夕
夏の宵

夏の夜
短夜
暑し
涼し
立夏
初夏
卯月
五月
夏浅し
夏めく
夏の匂ひ
薄暑

六月
入梅
半夏生
水無月
七月
三伏
土用
極暑
夜の秋
夏深し
夏の果
秋近し

天文
日陰
夏の月
夏の星
夏の雲
雲の峰
夏の空
梅天
炎天
卯の花曇
朝曇
五月闇

五月晴
夏の雨
五月雨
夕立
喜雨
夏の風
南風
青風
薰風
黒はえ
温風
蛇

俳句季題抄 (夏)

二一九

夏

二一八

夏の霞

霧原し

夏の海

土用浪

雷

鳴神はた・神

清水

苔清水

電

日盛

泉

瀧

早

地理

富士の雪解

青田

人事

夏の山

お花畑

夏の野

卯月野 夏野原

労働祭

端午

夏の川

菖蒲湯

林間學校

夏期講習會

歸省

暑中休暇

星祭

星合

七夕

海軍紀念日

神水

幟

武者人形

五月人形

菖蒲刀

草市 釜の市

中元

後の藪入

川狩

鶉飼

鶉川 鶉舟

夜焚

鯖釣る

流し釣

登山

避暑

裸

蹴

汗疹

汗

水蟲

日やけ

寝冷え

夏瘦

夏まけ

暑氣中り

コレラ

日射病

脚氣

土用灸

天瓜粉

定齋賣

暑氣下し

香水

更衣

給衣

セイル

夏衣

單衣

浴衣

帷子

上布

晒布

羅布

モリス

俳句季題抄 (夏)

夏羽織
夏袴
夏服 白服
夏シャツ
汗襦袢
夏帯
夏衿
腹當
甚平 ベジエン
夏蒲團
夏手袋
夏足袋

衣紋竹
白靴
夏帽
編笠
日傘
夏洋傘
夏座敷
青簾 すだれ
簀戸 よしこ
日除
夏暖簾
蠅帳

蠅捕器 はへ打
蠅叩 ハンモック
吊床 枕敷帳 紙帳
蚊帳 花ござ
寢蓆
籐椅子
竹床几
籠枕 水枕
水枕
晝寝
三尺寝
扇風機

扇團扇
花氷
蚊遣 蚊火
行水
打水 水まく
晒井 井戸替
蟲干 土用干
曝書
暑中見舞
夏場所 五月場所
夏芝居

盆狂言
船遊び
川床
川開
納涼 涼み臺 涼み舟
露臺
噴水
水泳 およぎ
海水浴
水遊び
花火
踊 音頭取

燈籠 提燈籠
走馬燈
岐阜提燈
風鈴
箱庭
水盤
水銭砲
麥笛
釣堀
繭 繭引く
絲取る
新絲

俳句季題抄 (夏)

二二三

二二三

新眞綿
 麥 稈
 田 植 早乙女
 田 草 取
 水 番
 誘 蛾 燈
 胡 麻 蒔 く
 豆 蒔 く
 茄子 植 う
 芋 植 う
 粟 蒔 く
 竹 植 う 竹節日

苗 賣
 草 刈 る
 菜 種 刈 る
 麻 刈 る
 蘭 刈 る
 菅 刈 る
 麥 刈 る 麥打つ 麥干す 麥むしる
 梅 漬 ける 梅干す 梅庭
 新 乾 瓢
 干 瓜
 奈 良 漬 製 す
 氷 室 氷室寺

冷 藏 庫
 冷 凍 魚
 夕 河 岸 晝あみ
 船 生 洲 生洲船 船料理
 あ ら ひ 洗ひ盤 洗ひ罎
 水 鰹
 水 貝
 土 用 丑 日 の 鰻
 泥 鰯 汁
 冷 し 汁 煮冷し
 新 節
 皮 鯨

瓜 揉 瓜なます
 冷 し 瓜
 冷 豆 腐 冷やっこ
 冷 麥
 冷 素 麪
 醬 油 造 る
 梅 酒 造 る
 新 酒 の 火 入
 燒 酎 酒盛
 冷 酒
 ビ ー ル
 甘 酒 一夜酒

氷 水 氷屋
 薄 荷 水
 蜜 柑 水
 氷 小 豆
 心 太 テッコロ
 ラ ム ネ
 ソ ー ダ 水
 サ イ ダ ー
 シ ト ロ ン
 ア イ ス ク リ ー ム
 飴 湯
 麥 湯

新 茶
 新 麥
 麩 々 汁 麥こかし
 水 羊 羹
 白 玉
 蜜 豆
 葛 饅 頭
 葛 餅
 柏 餅
 粽 キヌマ
 餅
 筍 飯
 餅 餅をす 餅の石 餅桶 餅なる

俳句季題抄 (夏)

宗教

祭 乞 夏祭
安 居 夏行 夏籠 夏百日 夏經
加茂競馬 競べ馬 勝馬
野馬追祭
淺草祭 三社祭
富士詣 山開 富士道者
東照宮祭
山王祭 日枝祭
墓 參
孟蘭盆 盂供

靈 祭 たま櫛 たな經

門 火 送り火
祇園會 曾山 山鉦 長刀鉦 鉦兒
天滿天神祭
明治天皇祭
施 俄 鬼
攝 待 かま茶
動物
鹿の子
鹿の袋角
蝙蝠 蚊食鳥
羽拔鳥

時 鳥

郭 公
閑古鳥
佛法僧
老 鶯 ヨシキリ 行々子
剖 葦 鳥
練雲雀
燕の子
夜 鷹
雷 鳥
水 鷄 ナクヒ
鶉

龜の子 鱧龜

蜥 蜴 ゲトカ

蛇 くらはは

蛇衣を脱ぐ

蝮 シマム

墓 ひき

雨 蛙 ただ蛙

青 蛙

河 馬 リオモ

鱉 スキ

鮪 チコ

初 鰹 かつを

だ ぼ 鰯

黒 鯛

麥 稈 鯛

岩 魚 ナイハ

飛 魚

鮎 魚

鯉

目 高

金 魚

兜 蟲

金 龜 子 コガネ ムシ

玉 蟲

螢

夏 蠶 夏籠 燈取繭

蛾

夏 の 蝶 蚊 蚊はしら

毛 蟲

子 子

蚊 子

蛆

蠅 トフ

俳句季題抄 (夏)

蚤
羽 蟻
水 馬 マシス
春 蟬 まつ蟬
蟬 空蟬 蟬時雨
蚊 蜻 蛉
蟻 地 獄
油 蟲
紙 魚 ヒツ
蜘蛛の子 くもくものこ
蛭 ニダ

蠅
蠅 虎 リハヘト
蜈蚣 デムカ
蚰 蜒 グダグダ
馬 陸 デヤス
蝦 蛄 コシヤ
船 蟲
蝸 牛 て、虫
蛞 蝓 クナメ
蚯蚓出づ
夜光蟲
老海鼠 ヤホ

植物
夏 草 草茂る
夏 菊
除 蟲 菊
百 日 草 ジンニヤ
夏 蓬
夏 葵 日車 日輪草
向日葵 てんちくはたん
矢 車 草
落 葉
若 牛 蒡
瓜 の 花

夕顔の花
瓢箪の花
南瓜の花
瓜
甜 瓜 まくは
メロン
胡 瓜
越 瓜 ウシロ
西 瓜
菘 茂 る
胡麻の花
チキタリス

金魚草
茄 子
蕃 茄 トマト
青 唐 辛
紫 蘇
花 魁 草
朝 顔 の 苗
朝 顔
晝 顔
新 菘
日 日 草
苺 イチゴ

藪 風
月 見 草
仙 人 掌 の 花 サボテン
青 蔦
金 蓮 花
牻 牛 兒 ヨウコシ
豌 豆
蠶 豆
莢 豌 豆
夏 萩
眠 草 おじぎ草
草 苺 いちご

夏大根
夏茶
甘藍
芍薬
釣鐘草
蓮の浮葉
蓮の花
蓮の實
睡蓮
カーネーション
松葉牡丹
藜ザアカ

帚草
芋
麻
茗荷の子
バナナ
燕子花
花菖蒲
百合の花玉簪花
鈴蘭
玉葱
薤ラツキヤウキ
蘭の花

菖蒲ウシヤ
根芋
麥麥の穂 麥の花
青蘆蘆茂る
早苗なへ
筍
竹の皮脱ぐ
今年竹わか竹
竹の落葉
藻の花
蒲の穂
夏蕨

1110

忍
一つ葉
微
早松茸
夏木立
茂り
新樹新緑
緑陰
若葉青翠
梔子クチナシの花
白丁花
桐の花

夾竹桃
青柿
杜鵑花さつきつゞじ
石榴の花
百日紅
神の花
梧桐
若楓
柚の花
橙の花
蜜柑の花
花橘

青山槭
夏蜜柑
夏藤
合歡の花
葉櫻
薔薇
青梅
こうめ
杏
李
早桃
桃すもみつ

俳句季題抄 (夏)

1111

櫻の實 櫻シ坊
 櫻桃の實 ユスラ
 山櫻桃 ウメラ
 莓 きいちこ
 枇杷
 林檎
 紫陽花
 卯の花 花卯木
 南天の花
 牡丹
 桑の實
 榎の花

栗の花
 椎の花 榊柳
 夏柳 モヤモヤ
 楊梅 モヤモヤ
 棕櫚の花
 時 候
 秋の日
 秋の朝
 秋の暮 秋の夕べ
 秋の宵

秋の夜 夜半の秋
 夜長 長き夜
 爽か
 立秋 秋立つ今朝の秋来る
 初秋 新秋
 文月
 残暑 秋暑し
 新涼 秋涼し
 冷やか
 秋めく
 葉月 仲秋
 中秋

九 月
 二百十日
 二百廿日
 十 月
 長 月 暁秋
 やゝ寒 うそ寒
 肌寒 秋寒
 朝寒
 夜寒
 露寒
 身に入む
 秋深し

暮の秋 行く秋の限秋の名に後果る
 秋惜む
 冬近し 冬を待つ 冬降
 天文
 月 秋の月 朝の月 夕の月 月の光 月の影 月の明
 初月夜
 二日月
 三日月 新月
 待宵
 名月 明月 今日の日
 雨名月 雨の月 無月
 十六夜の月 十六夜 既望

宵闇 十三夜 要名月
 後月夜
 星月夜
 秋の星
 流星
 秋の空 秋天
 秋の雲
 天の川 銀河
 秋光
 秋晴 秋日和
 秋の聲
 秋風 秋の初風

俳句季題抄 (秋)

颯 風
野 分 キノワ
雁 渡 し 青きた
秋 の 雨 秋さめ
秋 時 雨
露 白露の玉 露時けし
露 霜 水霜
秋 の 霜
富士の初雪
稻 妻 稻光り
霧 朝霧の夕露 夜
秋 の 虹

秋 の 霞
地 理
秋 の 山 山粧ふ
秋 の 野
花 野
野 山 の 錦
秋 の 川
秋 の 水 水澄む
出 水 秋出水
秋 の 海
秋 の 浪
初 汐

不 知 火
刈 田
花 畑 花だん
人 事
八 朔
重 陽 重九 菊の節句 菊の花酒
後 の 雛
休 暇 明
べ っ た ら
誓 文 拂
明 治 節
神 宮 競 技

菊 合 せ
菊 人 形
蜻 蛉 釣
初 獵
鹿 笛
鹿 狩 ガシ
鹿 の 角 切
下 り 築
根 釣
岸 釣
鯊 釣
蟲 賣

俳句季題抄 (秋)

蟲 狩
茸 狩
月 見
水 見 舞
行 水 名 残
赤 痢
秋 袷
秋 の 蚊 帳
蚊 帳 の 別 れ
礎 クヌ 小夜帖
燈 火 親 し
冬 支 度

障 子 洗 ぶ
夜 學
夜 食
扇 置 ぐ すて扇 忘れ扇 秋扇 扇置ぐ
秋 繭
新 絹
新 綿
新 藁
若 煙 草 掛煙草
牡 丹 根 分
大 根 蒔 ぐ
菜 種 蒔 ぐ

罌粟蒔く
 秋 耕
 案山子 鳥おとし
 鳴子 ひた
 蟲送り
 稲刈 稲こき 稲かけ 稲すす
 粃磨
 牛蒟引く
 豆引く
 蕎麥刈る
 菅刈る
 新米 今年米

新麴
 薯蕷汁 ころろ
 新蕎麥
 菊 膾
 柿 膾
 初鴨
 新酒 今年酒
 古酒
 濁り酒 さぶくろ
 温め酒
 利酒 ザキキ
 柿羊羹

栗羊羹
 栗飯
 松茸飯
 宗教
 秋祭
 解夏 ググ
 西鶴忌
 大文字火
 太閤忌
 地藏祭
 震災記念日
 芝神明祭

御難の餅
 乃木祭
 神田明神祭
 子規忌 系瓜忌
 後の彼岸
 秋季皇靈祭
 十夜
 芭蕉忌 橘青忌
 御命講 御會式
 神嘗祭
 夷講
 明治神宮祭

動物
 秋の猫
 鹿
 馬肥ゆ
 鳥渡る
 啄木鳥 ツキツ
 別れ鳥
 燕歸る
 鶺鴒 ズモ
 鶇 ミツ
 眼白
 頬白

稻雀
 山雀 ガヤマ
 四十雀
 椋鳥 むく
 鶉 ひよ
 鶉
 鳴
 雁 かりがね
 太刀魚
 落鮎 さび鮎
 秋刀魚 マサン
 鱒

初 鮭 さけ あきあち
 蟲 虫の聲 虫時雨
 秋の螢 あきこ
 秋の蠶
 秋の蝶
 芋 蟲
 蓑 蟲
 秋の蚊
 秋の蠅 うんか
 浮塵子
 秋の蟬 かなく
 蝸 ラシク

蜻蛉 やんま
 蟬 ロカグ
 蟋蟀 ロコホ
 松 蟲
 邯鄲 蟲
 鈴 蟲
 蠶 蟲 リスリギ
 馬追 蟲
 蝮 蝸 ラク
 蟻 蟻 はつた
 蟻 蟻

稻 蟲
 蚯蚓鳴く
 植物
 秋の七草 色草
 秋の草
 草の花
 草の實
 草の紅葉
 末 枯 ガウラ
 菊 菊
 殘 菊
 野 菊

藤 袴
 コスモス
 桔 梗
 冬 瓜
 絲 瓜
 南 瓜
 瓢 箆 よくべ
 夕顔の實
 女郎花
 男 郎 花
 新 胡 麻
 秋 茄 子

馬鈴薯 ズホホ
 酸 漿
 唐 辛
 薄 荷
 紫蘇の實
 甘 藷
 龍 膽 ダリン
 秋海棠
 蔦 蔦紅葉
 鳳仙花
 萩
 隱元豆

藤 豆
 落花生 南京豆
 枝 豆
 葛 葛の花
 辨慶草
 破 蓮
 白粉の花
 雁來紅 トウイ
 雞 頭
 蕎麥の花
 赤のまんま
 藍の花

俳句季題抄 (秋)

蘭の花
生 姜 はじかみ
芭蕉 イモネ
佛掌薯 ツクネ
萬年青の實
芋 莖 キズキ
芋の子
稻の花 稲の種 早稲 中稲 晩稲
落穂
粟
稗

蜀黍 コモ
玉蜀黍 ヨウモ
薄 花すき 尾花
蘆 蘆の種 蘆の花
荻 キヲ
相撲草
菌 たけ くまびら
松 茸 黄傘 初紅傘
紅葉 桐一葉
一葉
木の実
桐の実

木犀
柿
石榴
石榴
椿の實
木 槿
芙蓉
葡萄 萄
棗
楓
九年母
青蜜柑
金柑

二四〇

柚
橙
朱 欒 ンザボ
山椒の實
藤の實
梨
八朔梅
梅紅葉
南天の實
通草 ピアケ
無花果
棕の實

榎の實
椎の實
檜の實
櫟の實
團栗 グリン
栗
柳散る
新胡桃 くるみ
銀杏黄葉
銀杏 ギンナン
杉の實 いてよ

冬

時候

冬の日 日短か
短日
冬の朝
冬の宵
冬の夜
霜夜
つめたさ
寒さ
立冬 今朝の冬

俳句季題抄 (秋)

二四一

初冬 小春
 神無月
 十一月
 冬めく
 冬浅し
 冬され
 霜月 仲冬
 十二月
 冬至 極月
 師走 極月
 一月 むつき
 寒 小寒 大寒

寒の入
 寒の内
 冬惜む
 春近し 春を待つ 春歸
 年の暮 行く年の末 年の果 年の末
 小晦日 ゴツモ
 大晦日
 大年 年の夜
 除夜
 年内立春
 天文
 冬日

冬の月 寒月
 冬の空 寒空
 名残の空
 冬の雲
 冬の晴
 冬の風 北風 から風
 木枯
 冬の雨
 寒の雨
 時雨 初時雨 小夜時雨 村時雨
 霜
 雪 初霜 今朝の霜 霜の花 霜の聲

霰霞
 冬の霧
 冬の霞
 雪起し
 鱸落し
 地理
 冬山 山脈る
 冬野 冬の原
 枯野 くだら野

初雪 雪もよひ ふゆき
 大雪 夜の雪 雪明り
 雪の花 雪の聲

俳句季題抄 (冬)

冬の川
 冬の海
 冬の浪
 冬の水
 寒の水
 水濁る
 氷 氷溜り 氷厚
 氷柱 氷の花
 冬田
 人事
 爐開
 炬燵切る

亥子の餅
 残菊の宴
 顔見世
 七五三の祝 帯解 おび直し 袴着 かみおき
 観菊御會
 柚湯
 年忘 忘年會
 年末賞與 ボーナヌ
 年貢納 小作納
 餅搗 餅供 餅むしろ
 冬休み
 年の用意

年の市 備松賣 注連賣
 門松營む 能松立てる
 歳暮賣出し
 歳暮祝ふ せいほ
 暦の果 古曆
 御用納
 掃納
 筆納
 煤拂
 斧仕舞 かけ取
 掛乞
 年越

年守る
 節分 なやらひ豆撒 鬼は外ひ 福は内
 追儺
 年男
 厄拂
 厄落し
 寒施行 野施行 穴施行
 狩
 猪狩 狩くら 鷹狩 犬場
 鷹狩
 寒釣
 網代 網代守

泥鰯掘る
 竹馬
 雪遊 雪投 雪つぶて 雪丸け 雪連駝
 氷滑り スケート
 スキー
 雪見
 探梅
 麥蒔く
 大根引く
 蕎麥刈る
 齒朶刈る
 蓮根掘る

生姜掘る
 寒肥 綿打 綿弓
 綿邪
 風邪 ガアガリカ
 霜やけ
 雪やけ
 雪眼
 悴ぢける
 凍ゆる 凍死
 懐ろ手
 マスク

重え著
 胴着 こてら
 縵袍
 綿入 布子
 冬服
 冬シャツ
 冬帽
 頭巾
 手袋
 衿卷
 シヨール 肩掛
 外套

コート
 毛布
 股引
 足袋
 蒲團
 座蒲團
 雪杵
 櫛
 冬構
 霜除
 雪除 雪圍ひ
 雪搔

俳句季題抄 (冬)

避寒 日向ぼこ日向はこり 日向ぼこり 日
冬籠 屏風 障子 疊替あろり 爐ストーブ 暖爐 温突ドラム 火鉢火桶 炬燵 行火カン

湯婆ユタンボ たんぼ 懷爐 炭斗トリス 炭團ツンド 埋火 焚火 火事火の番 夜番 火のツペ汁 寒見舞 寒積古

寒聲 大根漬る 新海苔 狸汁 間汁酒のかす 粕汁 鯛ちり 鮫鰯鍋 寄せ鍋 牡蠣船 寒卵 鯛味噌

鹽鯰 鹽鮭 鍋焼 鍋焼 焼餅 寒搗 寒晒 蕎麥搔ガソバ 蕎麥湯 葛湯 湯豆腐 生姜酒

俳句季題抄 (冬)

霞酒 玉子酒 熱燗カン 寒餅 氷餅 水餅 雜炊スザ 飯櫃入イオハチ 宗教 達磨忌 一茶忌 近松忌

新嘗祭 大師講御佛事 報恩講 酉の町酉の市 一の酉 神樂 御祭 蕪村忌 クリスマス 熊祭 寒詣禊 詣 寒垢離寒行 鉢叩

大 年
被 籠
動物

熊 狼 孤 狸 兎 冬 猪 鯨 鷲
の 鹿
い
さ
な
し

鷹 木 寒 雪 千 鴨 鶯 鮫 鮫 鱈 鰯 鮪

つ ぐ
雀 鳥 鳥 鳥 鶯 鶯 魚 魚 魚
小 小 浮
夜 友 屋
千 千 屋
鳥 鳥 鳥
を を
し し
の の
香

鱈 潤 寒 寒 河 八 冬 冬 冬 穴
目 目 鮒 鮒 豚 目 目 目 熊
う
る
め

や
つ
め

寒 ぬ 梟 さ 尾 鵲 寒 凍 鷄 鳩 水
苦 ぐ り ー 越 始 鴉 乳 下
鳥 め 鳥 鳴 鴨 巢 鶴 魚
コ
マイ

冬 草 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯 枯
の 草 菊 蔦 蔦 萩 蓮 蕉 芭 薄 蘆 芝 荻

寒 葉 大 蕪 冬 漬 水 葱 寒 冬 枯 落
菊 丹 根 菜 菜 菜 仙 筍 木 立 木 葉
冬
菊
ね
ぶ
か

俳句季題抄 (冬)

木の葉
朽葉
冬紅葉
散紅葉
冬枯
霜枯
雪折れ
歸り花
温室の花
柵の花
藪柑子
萬兩

忘れ花 狂花

ヤブ
八手の花
冬椿
山茶花
茶の花
蜜柑
冬の梅
枇杷の花
冬薔薇
寒牡丹
枯柳
枯葎
寒獨活

早梅 冬至梅 寒紅梅

青木の實
深山樞
冬櫻
臘梅

二五〇

俳句季題抄一終一

短冊・紙色の書き方

短冊

起原

短冊の書き方に就いて説く前に、先づ短冊とは如何なるものであるかといふことから説明して行くのが、順序であらうと思ふ。

短冊は後に説く色紙と同様に、和歌や俳句等を書く料紙として用ゐられ、タシヤクともタンザクともいひ、古來短尺、短籍、短策、單尺とも書いてゐる。

その起原については明確に知ることは出来ないが短籍（ひねりぶみ）の名稱は相當古くから用ゐられてゐる、即ち日本書記齊明天皇御卷に「取短籍」ト謀反之事」とあるのを始めとし續紀、西宮記、北山抄等の文獻にその名は見えて

短冊

二五一

ゐるが、如何なる形式であつたか分らぬ。貞觀記に「奏文武官擬階短籍云々」とあることより一種の名札紙として用ゐられたことは想像できる。

さてこれに歌などを書くやうになつたのは、何時頃からかといふに、南嶺遺稿、閑田次筆等によれば清少納言の日記に、藤原道長が短冊の中文が澤山あつたので、之を裏返して歌を書いたとある。清少納言日記が信を置けるものならば如何なる形態であつたにせよ、これが和歌を短冊に書いた濫觴の様には思はれる。

寸法

短冊の寸法は、歴史的にいふと、頓阿法師が不破の關屋の板廂に準じて、長さ一尺、幅一寸五分、として當時の歌人冷泉爲世に送つたことがその最初で、それから漸次この寸法が世にひろまつたものであるといはれてゐる。

その後種々に變遷し來つたが、明治維新後その御用をつとめてゐた京都の山

本正春堂で製したといふ、長さ、一尺二寸、幅、二寸のものが現今行はれてゐる寸法である。練習用として短冊を簡單に作るには、卷紙を幅の二倍の長さに斷ち、更にそれを縦に三等分すると丁度この短冊の形になる。

書式

短冊の上下の見分け方は、常識である程度まで判別できるが、雲形や其他模様などで、一寸判別出來兼ねるものは空間の廣い方が必ず上部である。金、銀、白其他無地で、上下のないものは何れを上下と爲すも差支へないわけである。芽出度いことに用ゐるのは金銀、砂子の如き派手やかなもの、凶事の場合には白の無地を用ひるのが良いのである。

元來短冊は自詠のものを書く料紙であつたが、近年書道の勃興につれて鑑賞を主とする所から自然古歌をも書く様になつた。次に短冊書式の大要を述べて見よう。

一、短冊は三折半字がかりといつて、長さを三分してその第一の折目から半字分だけ上部から書き出し、下部は八七分をあけるやうにする。署名する場合は最後の字が、半字下りになるやうにしてあきが四五分となるやう納めることになつてゐる。和歌ならばこれを二行に上句下句と分けて書く、俳句などは一行で納める。それから色紙と同様ちらし書にする場合も、上下のあきは殆ど變らない、相當の歌人、俳人などで、全面一ばいに書いて顧みないのを見ることがあるが、折角の秀作佳句も臺なしである。墨つきは、和歌ならば第一句、第三句、第五句、俳句ならば、第一句、第三句の初めにするのである。

二、題を書くのは大概上部である。普通指先一節位をあきをとつて書き初める。

そして本文の歌が三折半字がかりで、少しも窮屈を感じないやうにする。もし題が四字、五字以上に亘る時は二行に書く、この場合熟語は必ず續けて切ら

ぬことが肝要である。亦、詞書のように長いものは二行乃至、三行に散らし書にする、又場合によつては、歌の間へわりこませて差支へない。

三、署名は元來自詠自書のものにするのであるが、近頃は他作のものを特に鑑賞的に書くことが多い。その場合は書の字を加へねばならぬ。

和歌に於ては昔から本名を書くのが禮とされてゐたが、近頃は大分雅號を用ひる人もある。

俳句などに於ては、寧ろ雅號が普通とされてゐる。しかし何れにしても文字は行草書體を用ひるがよい。その場合雅印を押す人もあるが避けた方がよい。

婦人は昔から二行目の頭字を少しく下げて、署名は裏面にする事になつてゐるが、今日はそれ程やかましくいはれてゐない。

最後に注意として申添へたいことは、最初はともすると行が伸びたり、詰つたりする故、字數から割出して目分量で位置をとるやう練習すること、二行書

の場合はなかなか程良く行かないもので、一方へ片寄つたり、真中があき過ぎたりするから、十分の注意を要すること、行の頭は漢字が揃はぬやう必ず一方を假名にせねばならぬこと、(この場合假名が揃ふのは差支へない)。

色紙

起原

色紙はもと色紙形と稱されたのが、形といふ字が省かれて、色紙と稱へられるやうになつたものである。故に式紙と書くのは誤りである。

色紙といふ言葉は、延喜式の散祭料に、「色紙四十張」空穂物語に「御ふみあり、春宮の亮の君もてまゐり給ひて、宮の御まへにまゐらせ給、浅緑の色紙一かさねつゝみて……」とあり、其他、源氏物語、枕草子等にも見えてゐるが、これは一種の紙の名稱であつた事と思はれる。

大鏡に、「……御障子にうたゑどもかゝせ給ひしに、色紙形をこの大貳にかけとのたまはするを……」とあり、小右記には「右大辨行成、書屏風色紙形……中略……和歌書色紙形一皆書名」とみえてゐるところより察するに、恐らくこれが今日の色紙の濫觴であらう。

寸法

色紙の寸法は、益軒全集によれば、大色紙、縦六寸四分、横五寸六分、小色紙、縦六寸、横五寸三分である。今日一般市場に行はれてゐるのは大體に於て左記の通りである。

| | | |
|-------|-------|-----|
| 大色紙 | 縦九寸 | 横八寸 |
| 普通の色紙 | 縦七寸 | 横六寸 |
| 小色紙 | 縦六寸 | 横五寸 |
| 豆色紙 | 縦三寸五分 | 横三寸 |
| 色紙 | | |

練習用として簡単に色紙を作るには、普通の巻紙、(幅六寸内外)を正方形の対角線に折り、その端を指二本だけ長く切ると、丁度普通の色紙位の型になる。

書式

色紙の上下は、無地で模様のないものは、別に上下はないわけだから、縦長に用ふれば宜しい。模様入のものはその模様によつて上下を定めねばならぬ。花鳥山水等の繪であつたら常識で上下の判別がつくが、唐草模様の様に互に連続してゐる場合は別に上下はないが、色に濃淡のある場合だつたら、濃い方を上にすべきである。雲形、霞形等の場合は、空間の広い方を上に、着色の異なる場合は濃厚な方を上に、淡薄な方を下に、青や紫の如く同一程度の感じあるものは、青を空の意味にして上に、雲と霞のときは雲を上にといふ風にすればよいであらう。砂子は廣く大きくちらしてある方を上に、同一の場合は紙端の空間の大なる方を上に、金銀兩色の場合は金を上にするやうに心掛ければ誤りは

先づ無からう。

書式に就いては古來種々なる様式があつて到底簡単に説明できない。殊に近古に於ては、相當にやかましく法式を定めたものがあるが、最近は殆ど自由になつてゐる。併し、出鱈目書きでよいといふのではない、要は全面を巧みに征服して自然の裡に盡きざる雅趣を藏するやうな書き方でなければならぬのである。

いま、書式を内容と形式とから大別してみるならば、左の如きものである。

内容からは

- 一、題又は前書きのあるもの
- 一、作者名のあるもの
- 一、題(前書)と作者名のあるもの
- 一、歌のみのもの

色

紙

形式からは

- 一、普通散文的なもの
- 一、ちらし書きのもの

注意として申添へたきことは、模様あるものに書く場合、繪の色が濃い場合や生物に於ける眼や花の蕊は避けるがよい。人物などは全體をさけて書くことが好ましい。

左右上下のあきは廣狹宜しきを得、上と下、左と右とのあきを各々等しくするやうに工風したい。ちらしの場合に於ては最も兩端の空間を等しくするやうに書く方がよい。上達したものは、歌切の様に片隅に寄せても釣合もとれるし、趣もあるが、初歩の者は飽くまで、上下左右の空間を等しくするやう練習がぞましく。

揮毫上の注意

最後に、實際の揮毫に當つて心得べきことを申述べよう。尤もこれは強ち色紙に限つたことではないが、詩歌や文章を觀賞物として書く場合はその詩歌文章（自作他作を論ぜず）を觀賞し、翫味して書くことが肝要である。

故に、色紙を用ふるに際しても、白色、無地乃至雲形等のものは總てのものに通用して差支へないが、模様とか繪畫のあるものは料紙の選擇に細心の注意を要する。例へば山の模様のあるものに海の歌を書くとか、櫻の模様のあるものに冬の俳句を書くが如きは甚だ觀賞價值を傷けるもので避けねばならぬことである。

慶弔禍福等の場合に用ひるものに就ては層一層の吟味を要する。即ち慶祝のものには金銀を初め明るい色彩のものを選ぶし、凶弔の場合は金銀、赤等のもは絶対に避け白地無地のものを選び様にならぬ。

次に、ちらし書の場合に於て、たゞ漫然と書いたり、ちらし方が面白いとい

ふ丈では不十分である。その詩歌文章の中心點を確り把握してこれを紙面に躍動せしむべきである。即ちちらし方によつて、一方に偏したとしても、墨書き、文字の排列等の技巧によつて、重點を表現するやうにとめたいものである。かくすることによつて書道の藝術價值も發揚でき得るのである。

短冊色紙の書き方の説明に就いてはこれで止めておくが、尙個々の場合については、諸君が各自に、手本に就いて研究せられんことを希みます。

(高塚竹堂氏著短冊色紙の書方に據る)

俳句の作り方入門 一終



一月(大)

(異名)

正月・睦月・初空月

太郎月・霞初月

建寅・上春

青陽・隙月・大簇

人の來る鳥影せよし三ヶヨ

鬼貫

一

年中 ①一日 元旦の若水。初日出を拜す。氏神まうで。②一日から三日まで三ヶ日、屠蘇酒を祝ふ。③二日書初め。商家の初荷。④三味線のはじめ。船の乗初め。⑤五日新年行事。船を比の下に敷きて初歩を見る。⑥二日又三日書初め。⑦四日政事始め。⑧五日新年宴會。⑨六日酒防出初め。門松撤去。⑩七日御講書初め。七枝粥。⑪八日陸軍始め。松飾を取り去る。⑫十月初年兵入營。⑬十一日鏡開き。土燈開き。⑭十四日注連撤去。⑮十五日海軍始め。小正月。小豆粥。⑯十六日えんま詣。藪入。⑰十八日御歌始め。初觀音。二十日骨正月。⑳廿五日初天神。㉑廿八日初不動。

東京 ①元旦吉方詣。②元日より三日まで七福神詣。向島の七福神(三浦社内のえびす大黒、弘福寺の布袋、多聞寺の毘沙門、白髭の長老、百花園の福祿壽、長命寺の辨天)。③谷中重原の毘沙門。④谷中長安寺の長老。⑤日暮里花見寺の布袋。⑥田端西行庵の福祿壽。⑦山の手七福神(目黒不動のえびす大黒、目黒福壽寺の辨天、二本榎の毘沙門、白金高輪聖寺の布袋、白金妙圓寺の福祿壽)。⑧祖師初詣(虎の内神法寺、池上木門寺)。⑨五日初水天宮詣(日本橋區京町)。⑩十日芝野平町金刀比羅神社初祭。⑪初芝居(首座)。⑫十日前後の木曜より十一日問大角力春遊所。⑬八日淺草初觀音詣。⑭廿一日初大師川崎市平間寺。⑮廿五日馬場神社龜戸天神。⑯初不動(目黒龜崎寺、目黒新長寺、目赤南谷寺、兩國觀音、深川公園側、下總成田山等)。

地方 ①三日宮崎宮玉登壇(筑前)。②七日大塚府神社追善祭(筑前)。③九日喜代主神社(阿波)。④十一日船市(信濃)。⑤十四日下鴨神社神事(山崎)。⑥八幡神社松焚祭(陸前)。⑦綱打の神事(近江)。⑧十八日多井輪神社(盛津)。⑨廿四日阿部野神社(盛津)。竹林寺(土佐)。

旬の物 鯛・鮒・鱈・鰯・鰯・伊勢鰯・鮎・鰻・貝柱・白魚・蒲鉾・田作・数の子・牡蠣・鰻・鴨・鳩・鶉、其他小鳥の類。慈姑・蓮・小菰菜・きんとん・黒豆・里芋・牛蒡・人参・獨活・小松菜・芹・三つ葉・蜜柑の類。

花卉 福壽草・雪割草(すはまさう)。臘梅・寒木瓜・數柑子・まんさく・水仙・寒牡丹・蘭天・夢菊(注意。海濱と山手、南と北、既に若干の距離を有する時には、花の通達がある。まして温室物の發達した今日、このページの記載は、單なるヒントであらう。各月共之に準ずべし。)

隅々に残る寒さや梅の花 藤村



二月 (平)

〔異名〕

衣更著・梅見月・雪消月・初花月(巻) 仲陽・仲春・陽月・如月・令月・夾鐘(巻)

年中 ●三日節分會。●十一日紀元節。●初午の日に稻荷祭。●初庚申の帝釋天。●十五日行事 鎌倉御慶會・西行忌。●廿日日蓮上人誕辰會。●廿八日利休忌。

東京 ●梅見 九段靖國神社内、小石川稲荷園、鷺戸天神社内、向島百花園、深川公園、上野公園、芝公園、池上・原村・蒲田の梅園、羽田・大師河原の梅屋敷、杉田梅林、越ヶ谷、大伏、用賀(玉川電線)、吉野(青梅線)日向和田驛下車、水戸公園 ●初午市内外の稲荷社 ●四日節分豆撒き(道徳の神事) 成田山・川崎大師・芝罘神社・赤坂

市内外の稲荷社 ●四日節分豆撒き(道徳の神事) 成田山・川崎大師・芝罘神社・赤坂 豊川稲荷・淺草觀音・鷺戸天神・深川不動及び市内各所 ●四日四十七士群忌日高橋泉岳寺 ●八日針供養(淺草寺境内淺草橋) ●十五日釋迦涅槃會・淺草寺・増上寺・傳通院 ●廿一日西新井大師開帳 ●廿日より三月二日迄鎌倉市日本橋十軒店。

地方 ●一日枚岡神社(河内)・鶴戸神社(日向) ●四日足利節分(下野)・岡山神社節分(長門) ●八日毘沙門天(駿河) ●九日柳原比須(畿津)・西宮惠比須(畿津) ●十日養生石部神社(加賀)・善初午稲荷神社(常陸)。

初物の物 大根・鳥貝・芹・土薺・山の芋・牛肉・山鯨・鱒・鱈・鮭・鮪・あなご・かれひ・ばか貝・春菊・よめな・紫蘇の芽・蕨の葉・わかめ・小鳥類。

花卉 梅の花・さんしゆゆ・まんさく・黄梅・ぼけ。温室物としては、アブチユロン、グイオレット・アルメリヤ・パンジー・シネラリヤ・ペゴニヤ・水仙・つるあふひ・プリムラ、鈴蘭・チューリップ・フリージア・ヒヤシンスなど。



三月 (大)

〔異名〕

彌生・櫻月・花見月・春惜み月(巻) 桃辰・暮春・季春・窮月・蠶月・姑洗(巻)

年中 ●三日桃の節句。菖餅・白酒・豆入種など饗に供へて女の兒遊ぶ。●帝釋天。●曲水の宴。●十日陸軍記念日。●十八日春の彼岸。●廿一日大師節。●彼岸頃六阿彌陀講。●二十五日送如忌。

東京 ●一日帝大記念日 ●十日金刀比羅大祭 虎の門等神社 ●十五日麻若忌 向島木母寺 ●彼岸 諸法事會・六阿彌陀講(下谷上野廣小路常樂院・田端樂樂寺・西ヶ原無量寺・豊島西福寺・沼田延命院・鷺戸常樂院) ●西方六阿彌陀(芝西久保大護寺) ●麻布飯倉寺長寺・芝三田三丁目春林寺・高輪庚申堂橋町正覺寺・白金正源寺・目黒祐天寺 ●十八日池上木門寺開帳 ●廿一日大師 川崎平間寺・西新井總持寺・芝二本榎高野寺・向島蓮華寺 ●二十八日千輪実神祭 ●桃の花 川崎大師河原・越ヶ谷河原曾根・市川・野田・古河 ●彼岸饗 上野公園 ●贈鈞 本所押上 葦寺河津・小梅・貞舟通 ●散歩がてら登森お仙と春信の碑へ(谷中六圓寺)。

地方 ●三日神部神社・淺間神社・大蔵御嶺神社(駿河) ●五日野田神社(周防) ●七日摩那(横津) ●十日若狭神社(下谷) ●金比羅山(肥前) ●十三日春日神社(大和) ●十四日竹駒神社(陸中) ●美濃輪稲荷(駿河) ●十五日節分神社(上野) ●興濟宮祭典(豊後) ●風須山(肥前) ●舊十五日大寶八幡(常陸) ●祇原八幡宮(豊後) ●十六日廣田神社(畿津) ●十八日宇佐神社(豊前) ●媽祖祭典(豊後) ●廿一日善光寺(長野) ●鴨江寺(駿河) ●二十七日お日様のお祭(下野)。

初物の物 春菊・三つ葉・花抽子・芹・ひじき・さんしよの芽・山鳥・雉子・小鳥類。赤貝・蛤・鮫・鱒・鱈・こち・きす・さば・にしん・さくら鱈・さより・しらうを・いか・さめ・このしろ・はうぼうなど。

花卉 春福・山菜莢・木瓜・蓮根・早櫻・つゝじ・雪柳(こごめばな)こてまり・沈丁花・木藤・あせほ・姫こふし・しやが・長春ばら・紫陽。其他温室物。

三尺の庭を詠むる春日かな 子規



四月(小)

(異名)

卯花月・卯月(卯花月)
花残月・夏端月(夏)
首夏・孟夏・清至・
維夏・乾夏・仲呂(運)

年中行事

●一日年々「四月馬鹿」の戯言く多し。●上旬沙千荷。●八日釋尊降誕會。●十五日撒期満了。●聖徳太子祭。●廿一日より五月十日迄壬生念佛。●廿七日結核後防デ。●廿九日清國神社春季祭禮。

東京之部

●櫻の満開中より下旬へかけて。十日植物園・日比谷・上野・芝・飛鳥山・瑞穂神社・市川。十一日千鳥ヶ淵・江戸川。十二日神田川上水べり。川崎大師・三宅坂。大塚橋内。青山墓地。渋谷。沼田堤。千川上水べり(一重)。十七・八日小金井。十八日荒川。千川上水べり(八重)。●上旬沙千荷。●品川登壇邊。●高野宮下。●越中島附近。●淵田川。●櫻草。●浮間開帳。●木下川淨光寺。●九日向日島。●泉岳寺義士祭。●八日日比谷公園花祭。●木下川開帳。●下野公園。●芝公園。●六日開神社祭禮。●美術館台屋會(其他)上野公園。●十八日東照宮大祭。●上野公園。●芝公園。●廿日平河天神祭。●町區平河町。●下旬東都六大學リク戦。●中旬より五月四日迄五月人形陳列 日本橋區十軒店。

地方之部

●一日大和神社(大和) ●松島神社(朝鮮水浦) ●二日松尾神社(山城) ●三日權原神社(大和) ●梅宮神社(山城) ●氣多神社(能登) ●四日廣安神社(備前) ●備前神社(大和) ●備前神社(山城) ●七日美保神社(出雲) ●八日大原神社(山城) ●備前神社(大和) ●九日稻荷神社(山城) ●大神神社(大和) ●十日平野神社(山城) ●十一日山中神社(越後) ●十三日武田神社(甲斐) ●入彦神社(備前) ●十四日小幡山・神神社(陸中) ●香取神社(下總) ●日吉神社(近江) ●十五日平安神宮(山城) ●建部神社(近江) ●熊野坐神社(紀伊) ●諏訪神社(上野) ●金澤神社(武蔵) ●生田神社(越前) ●淺間神社(甲斐) ●西宮多神社(豊後) ●金澤神社(越後) ●大野神社(朝野) ●十七日東照宮(駿河) ●二荒神社(下野) ●清水寺(播磨) ●十八日吉田神社(山城) ●小園神社(遠江) ●須佐神社(出雲) ●順徳觀音(肥前) ●廿一日宇信神社(因幡) ●廿二日伊弉諾神社(淡路) ●多賀神社(近江) ●旬の物 ●こぼらうど・初茄子・菊・からび・春菊・ふり・はぜ・櫻餅・ひらめ・にしんなど。●花卉 ●フロックス・ルピナス・シレン(草薙)・ネモフィラ・ヒヤジンス・チユトリツツ・カーネーション・櫻・すもも・あんず・りんご・菜の花・雪梅・こでまり・海棠・つつじ



五月(大)

(異名)

早月・橋月・早苗
月・月見ぬ月(舊)
超夏・仲夏・茂林・
臯月・鴨月・菴寶(舊)

年中行事

●一日メデー。●五日全國乳幼児愛護デー。●端午の節句。●湯湯湯。●五月十日頃より夏場所大角力。●十四日第百九回足立會。●廿七日庚申持。●海軍記念日。

東京之部

●葉隠 上野・向島・江戸川 ●新緑 郊外 ●初旬開帳 日比谷公園・清水谷公園。●吾羽護國寺・小石川植物園・館林 ●中旬牡丹 本所四ツ目・三河島・自照各所 ●八日聖師開帳 ●十日金比羅開帳 ●隔年十三日より十七日迄神田神社御祭 ●中旬芍薬 本所四ツ目・曳舟・自照・芝公園 ●十七日八日清三三社祭 ●中旬・下旬藤 ●戸牛島の天神社内・芝公園開天池・日比谷公園・淺草公園・自照・清水谷公園・野田家樂園・稲荷等。●廿一日川崎大師 ●廿八日不動開帳 ●月夜・成田新橋寺 ●改策 和田山區學堂など。

地方之部

●一日三方原風揚(駿河) ●結城神社(伊勢) ●關野神社(越中) ●二日沼名神社(備後) ●石高屋八幡宮(讃岐) ●三日水若酢神社(陸奥) ●四日風間神社(三河) ●和歌山稻魂祭(紀伊) ●五日菊池神社(肥後) ●多度神社(伊勢) ●南宮神社(美濃) ●大岡磯神社(武蔵) ●中津神社(長門) ●水天宮祭(豊前) ●六日金崎宮(越前) ●白山比咩神社(加賀) ●七日名和神社(伯耆) ●古四王神社(羽後) ●八日大物忌神社(羽後) ●十日函館拓成社(渡島) ●十二日京舞神社(富山) ●十三日稻積神社(甲斐) ●高十三日城隍祭(盛岡) ●十五日加茂祭(京都) ●京舞神社(加賀) ●十七日波上宮(秋田) ●十九日花神社(因幡) ●廿一日加茂神社(長門) ●二十二日和田神社(福津) ●二十四日吉良神社(陸中) ●二十五日太宰府神社(前) ●諏訪神社(武蔵) ●下旬千鳥神社(越後) ●旬の物 ●あなご・ます・あゆ・鯛・あま鯛・黒鯛・鮪・鯛・鱈・きすどちやう。●ぜんまい・白瓜・苺・たけのこ・蓮根・百合根・いも。●苺・ネーブル・りんご・バナナ・レモン・文旦・チエリ・湯室メロン・梨・夏産用・パイナップルなど。●花卉 ●卯の花・かきつばた・菖蒲・藤・牡丹・つばき・芍薬・スサトピー・わすれな草・石竹・カーネーション・アルメリア・松葉菊・美女櫻・ベチユニヤ・そなれ・泡盛草など。

夏嵐机上の白紙飛び盡す

子規



なす

六月(大)

(異名)

水無月・常夏月・
鳴神月・風待月(豊)
晩夏・極暑・季夏・且
月・伏月・林鐘(舊)

年中 ●四日光厳祭。ムシ御除防デ！ ●十日甲子特。「時」の記念日。 ●十七日豊海蔵
行事 修治始政記念日。 ●三十日六月大威。各神社。

東京 ●上旬花菖蒲 堀切・三河島・本所四ツ目・向島百花園・曳舟通吉野園・蒲田高雷
之郎 園・日比谷公園 ●十四五六日 山王祭・麴町日枝神社 ●十六日水川神社祭禮・
赤坂水川神社 ●十八日より廿一日天王祭・四谷須賀神社 ●廿 谷中祭禮・本所押上・
大宮公園附近・見沼川 ●散策 中野接道大宮八幡 ●掃苔 文京小泉八雲・島村抱月(共
に磯司ヶ谷墓地)。

地方 ●一日丹生川上神社下社(大和)・貴船神社(山城)・東照宮(下野) ●四日旭川招魂
之郎 祭(石狩) ●五日上加茂鼓馬(京都) ●七日八坂神社(阿波) ●八日鞍馬の竹伐(京
都) ●十五日札幌神社(石狩)・八坂神社(山城)・日枝神社(武蔵) 舊十五日城隍祭(豊
前) ●十七日伊勢大神宮(伊勢)・鹿島神社(安藝) ●廿一日熱田神宮(尾張) ●廿八日大
山祭(和歌) ●三十日住吉神社(畿内)。

旬の物 りんご・早稲・かぶ・人参・こぼろ・夏蜜柑・枝豆・とうがん・水蜜桃・枇杷・さ
くらんぼ・いろこ・初鮎・鮎・鮎・黒鯛・いな・ころなど。

花卉 薔薇・撫子・あざみ・花菖蒲・朝顔・芍薬・アカシヤ・ユギタリス・葵の花・金鶴草・
オキザリス・がく・あざさひ・さんざし・ぎばうし・たはばな草・山百合・しもつけ・紫
丁花・白丁花・未央柳・金鈴梅・紫陽・黄紫陽など。



へちま

七月(大)

(異名)

文披月・棚機月・
文月・女郎花月(豊)
上秋・孟秋・蘭月・
新秋・肇秋・夷則(豊)

年中 ●上旬中元賣出し。 ●一日南洋應始政記念日。 ●七日七夕祭。講書。 ●十日頃より暑
中休憩。 ●十日朝日四萬六千日。 ●十三日から十五日盂蘭盆。 ●十五日中元。 ●
十六日散入。 ●其他夏祭多し。

東京 ●初旬湯治場を開く ●十日四萬六千日 浅草寺・魚籃坂観音・護国寺観音・駒込大
観音 ●初旬より八月蓮 上野不忍池 ●十二日草市 浅草廣小路・神田旅籠町・兩
國亭研地・芝居町下町・四谷馬場町・京橋八丁堀・牛込神楽坂等 ●土用丑の日 市
中の瑞雲 ●納涼 芝浜・大森海岸一帯・芝公園・愛宕山・十二社・神田明神・湯島天神・
上野公園・兩國・隅田川・河崎・日枝神社・目黒不動の滝・湯野川不動の滝・羽田露泉・
池上・等々力村・大宮公園・王子・目黒の新富士・桐ヶ谷の滝・清水の滝・高尾山 ●海
水浴 扇島・磯子・本牧・羽田・新子安・護国・江の島・逗子・葉山・三崎・大磯・沼津
磯津・茅ヶ崎・大磯・小磯・箱根・箱根・谷津・一の宮・館山・大原・御宿・勝浦・木更
津・館子・大洗 ●下旬 兩國川開き煙火。

地方 ●一日櫻鴨神社(山城) ●七日御崎神社(出雲)・紙園祭(筑後) ●九日生魂神社(大
阪) ●十日西宮神社(陸前) ●十二日湊川神社(攝津)・紙園神社(攝津) ●十三日
之郎 岩屋神社(攝津) ●十五日月山神社(羽前)・柳田神社(筑前)・出羽神社・湯殿山神社
(羽前) ●十九日祇園祭(下野) ●二十日上川神社(石狩)・桐生紙園祭(上野) ●二十二日天
滿宮(土佐)・舊二十四日彌八地蔵尊(美濃) ●廿五日天神祭(大坂)・宗忠神社(美作)・宇佐八幡宮(豊後)。
●廿八日阿蘇神社(肥後) ●廿九日住吉大祭(大阪)・宗忠神社(美作)・宇佐八幡宮(豊後)。

旬の物 ミヨウリ・藤・茄子・いんげん・しひたけ・蕪・芋・トマト・梨・西洋梨・きはだ・ま
ぐろ・鯖・鮎・鮎・こち・鮎・鮎・鮎など。

花卉 ひらがは・タリヤ・あざさひ・ベチユニヤ・百合・羽衣草・夏菊・千鳥草・紫つゆ草
松葉牡丹・草薺・レアトクボシ・アラヒコメ・くちなし・金蓮花・のうぜんかづら・
おはらばらさう・とくさ・雪の下・布曇葉・蓮・朝顔・ルトベギア・など。

泊る氣で一人來ませう十三夜

蕪村



十月(大)

〔異名〕

神無月・時雨月・
初霜月・小春月(舊)
初冬・孟冬・去英・
上英・陽月・夏月(舊)

一〇

軍中 ●一日茶室の閉開き。朝鮮總督府始政記念日。●五日蓬萊忌。●十二日頃池上本門寺。●十三日戊申詔書記念日。菊供養。●十四日掃部記念日。●二十日えびす講。●三十日教育勸進記念日。●十五日より翌年四月十五日まで狩獵。

東京 ●六日より十五日十夜法要。深川靈巖寺。●八日より十三日會式。池上本門寺。●堀の内妙法寺。●觀月(陰曆九月十三夜)。上野。芝浦。品川。羽田。大森。洲崎。愛宕山。九段。神田明神。湯島天神。飯田川。待乳山。●十日高島天神祭。●十九日へつたら市。日本橋。大傳馬町。麻布町。●二十日より十一月下旬菊見。●三河島。麻布廣尾。目黒。芝公園。日比谷公園。●下紅葉。臨野川。品川海雲寺。●首狩護國寺。芝公園。上野公園。日比谷公園。●下紅葉。臨野川。品川海雲寺。●下紅葉。上野公園。上州妙法山。上州藤水橋。野州日光山。甲州御座。箱根山。●愛宕。目黒。●廿三日湯島神社祭禮。●中旬より帝國美術院展覽會。上野公園。●下旬市部六大學野球リーグ戦。

地方 ●一日朝鮮民衆主權大運動會(朝鮮)。●豐榮神社(廣防)。●四井神社(信濃)。●四日北野神社(京都)。●上旬徳重神社(藤原)。●七日赤間神社(長門)。●八日丹生川神社(大和)。●田村神社(茨城)。●諏訪神社(肥前)。●九日大神山神社(信濃)。●物部神社(石見)。●湯島神社(陸中)。●稻荷神社(鶴城)。●石清尾八幡宮(讃岐)。●雲崎八幡宮(長門)。●十日梨木神社(山城)。●若狭彦神社(上社)(若狭)。●金刀比羅宮(讃岐)。●仁川神社(朝鮮)。●中旬頃の角切(大和)。●霧山神社(安藝)。●十一日舟神社(播磨)。●安仁神社(備前)。●大鹽神社(尾張)。●徳應寺のお會式(駿河)。●十三日高良神社(筑後)。●岩屋神社(福津)。●十四日開野神社(出雲)。●十五日湯島山神社(朝賀)。●大桑牛祭(京都)。●熊野連玉神社(伊太祁谷神社(紀伊)。●酒列磯前神社(常陸)。●伊弉利神社(藤原)。●枚聞神社(播磨)。●泉野神社(加賀)。●掛川の祭典(駿河)。●十七日長田神社(福津)。●十八日長田神社(福津)。●吉備津神社(備前)。●十九日忌部神社(阿比)。●二十日出石神社(但馬)。●廿一日二荒山神社(下野)。●出雲神社(丹波)。●廿二日鞍馬火祭(京都)。●廿六日宮崎神社(日向)。●廿八日靈巖神社(愛媛)。●照國神社(陸奥)。●廿九日香椎宮(筑前)。●廣島招魂祭(安藝)。●鹿澤山神社(下野)。

切の物 ●柿。栗。柚子。人蔘。大根。芋。鰯。さんま。いな。あち。小鳥など。

花卉 ●菊。萩。うめもどき。みむらさき。木犀。鳩島草。つりふね草。みづひき。黄菊頭など。



十一月(小)

〔異名〕

霜降月・神樂月・
霜月・雲見月(舊)
仲冬・葺月・子月・
復月・黄鐘(舊)

戸を叩く狸と秋を惜みけり

蕪村

一一

軍中 ●二日去來忌。●三日神農祭。●八日臨祭。●十日國民精神作興講書記念行事日。●十一日休戦記念日。●十月末より十一月中旬まで陸軍大演習。●廿一日大師講。●十一日より近松忌。

東京 ●紅葉。王子。臨野川。香取。遅くは確氷。日光。箱根。●十五日七五三の祝日。

之部 ●枝。神田。水川。富岡八幡宮。其他各社。●西の日西の市。下谷靈泉寺町大鳥神社。●深川公園。向島秋葉神社。四谷須賀神社。新宿華南神社。●廿二日より廿八日まで報恩講。●廿四日より廿八日まで淺草西本願寺。●築地西本願寺。

地方 ●一日六條比古神社(阿波)。●佐世保氏神祭(肥前)。●四日淺間神社(駿河)。●五日之部。都農神社(日向)。八日伏見火祭祭(京都)。●九日住吉神社(豊岐)。●十五日中山法華寺會式(下總)。●宗像神社(筑前)。●十七日設山神社(大和)。●十九日西の宮神社(駿河)。

切の物 ●ほうれん草。くわい。松茸。大根。菜。海苔。伊勢海老。かじか。むつ。目鯛。鰻。ぶり。柿。牡蠣。鴨。りんごなど。

花卉 ●山茶花。つばき。茶の花。菊。雁来紅。扶桑木。サルビア。コリウス。アゲタラム。つげ。うめもどき。観音草など。



青菜

十二月(大)

(異名)

師走・三冬月・極月・梅初月(鹿)・暮冬・晩冬・窮冬・黄冬・臘月・大呂(鹿)

年中 ●十四日義士打人記念日。●廿三日柚子湯。●廿五日前後クリスマス。●廿五日菰行事 村忌。●二十五日より各學校冬期休暇。●三十一日大祓。●下旬煤ばらひ。●下旬餅つき。

東京 ●十四・十五日の市 深川八幡、十七・八日淺草寺、廿・廿一日神田明神、廿四日芝之部 愛宕、廿五日廻町平河天神・湯島天神 ●廿八日兩國藥研堀不動、三十・三十一日 下町、日本橋より新橋・兩國廣小路・今川橋邊・上野廣小路・淺草雷門前・人形町通・同上山手、牛込神樂坂・四谷門外・佛馬町邊・旗布飯倉四ツ辻・赤坂表町通 ●公設年の市 中野谷・新宿・品川・瀧野川・日暮里・寺島 ●十二・一・二月雪見 向島木母寺・淺草待乳山・上野公園・愛宕山・廻町公園・大森 ●羽子板陳列十軒店其他 ●廿日頃よりクリスマス裝飾 ●廿五日前後クリスマス祝會 基督教各派會堂。

地方 ●一日若宮八幡牛馬市(豊後)・一日より一月廿日迄大邱藥令市(朝鮮) ●五日敢國之部 神社(伊賀) ●九日大塚別院報恩講(美濃) ●十日八幡大願祭(美濃) ●十四日秋葉山(駿河) 射橋兵士神社(藤津) ●十五日住吉神社・忌宮神社(長門) ●二十二日宗廟神社(備前)。

旬の物 大根・ねぎ・かぶ・根芋・みつば・のり・林檎・ジャボン・蜜柑・佛手柑・ひらめ・ふな・白魚・なまこ・あんこう・かに・鮭・鳥肉・獸肉など。

花卉 さざん花・つばき・水仙・寒菊・やつせ・つばき・臘梅・早梅・多牡丹・繡草・雪割草(すはまさう)・南天・さかき・千両・萬両・寒菊・岩櫻木(ポインセチア)・など。

昭和十二年六月二十日 印刷
昭和十五年六月二十八日 發行
昭和十五年十一月五日 譲受再版印刷
昭和十五年十一月十五日 譲受再版發行

定價 金壹圓貳拾錢

著 者 沼 波 瓊 香

版 權 發 行 者 京都市下京區四條通大宮東入 伊 藤 嘉 市

所 有 印 刷 所 京都市上京區上槇木町淨觀寺西入 法 文 社 印 刷 所

發 行 所 京都市下京區四條通大宮東入 洛 東 書 院

電話 壬生九九四番 振替 京都三三〇一番

910
168

終

